National Institution For Youth Education
国立青少年教育振興機構

令和３年７月 19 日
独立行政法人国立青少年教育振興機構
青 少 年 教 育 研 究 セ ン タ ー

青少年の体験活動等に関する意識調査（令和元年度調査）
～心身の諸側面、社会経済的背景との関係～

国立青少年教育振興機構では、平成 18 年度から青少年の自然体験、生活体験、生活習慣の実態や自立に関する意識等について全国規模の調査を行っています。この度、最新の調査（令和元年度調査）の結果がまとまりましたのでご報告いたします。

■調査結果のポイント

（１）2010 年代を通じて、子供の自然体験の一部に、やや減少傾向がみられる。

（２）自立的行動習慣が身についている子供や自己肯定感が高い子供の割合は増加傾向にある。

（３）自然体験や生活体験、文化芸術体験が豊富な子供、お手伝いを多く行っている子供は、自己肯定感が高く、自立的行動習慣や探究力が身についている傾向がある。

（４）就学前から子供の外遊びを奨励する保護者の働きかけに注目すると、その後の探究力の向上に肯定的な影響を及ぼす。

（５）外で過ごす時間の長さが、子供の肥満と近視傾向の抑制につながる可能性がある。

（６）社会経済的背景の相違に関わらず、自然体験が多い子供ほど、自己肯定感が高く、自立的行動習慣が身についている傾向がある。また、公的機関等が行う自然体験活動に関する行事へ小学生が参加しない理由として、世帯年収が 400 万円未満の家庭は、経済的あるいは時間的な負担によるものが多くみられた。

詳細は裏面に続きます⇒

【お問合せ先】
国立青少年教育振興機構　青少年教育研究センター
担当者：客員研究員 池田　，　企画室 大西
住所：東京都渋谷区代々木神園町３-１
TEL：03－6407－7741　E-mail：kenkyu-soumu@niye.go.jp

【調査の概要】

令和元年度調査では、多様で変化の激しい社会において個人の自立の必要性が指摘されていることを踏まえて、将来の社会的自立の基礎となる資質・能力の一つとして青少年の自立的行動習慣に関する指標である「自律性」、「積極性」、「協調性」に着目し、自然体験、生活体験、お手伝いといった体験活動、早寝早起き朝ごはん等の生活習慣、自己肯定感や心身の疲労感に関する意識等との関係について分析しました。また、ボランティア体験、文化芸術体験に関する内容を加えて、体験活動をとらえました。

さらに今回は、「総合的な探究の時間」でも重要視されている探究に関わる資質・能力を「探究力」としてとらえ、これらを測定するための設問や、幼児期の外遊び、生理的指標、社会経済的背景に関する設問を追加し、追加分析と考察を行いました。

（1）調査の目的

青少年教育関係者が実施する事業の企画立案、運営等に資するため、青少年の体験活動等や自立に関する意識等の実態について全国規模の調査を実施し、基礎資料を提供する。

（2）調査内容

①青少年調査

・自然体験、生活体験、社会体験、お手伝いの実態
・１年間（平成 31 年 4 月から回答時点まで）の学校外での体験活動、文化芸術体験
・生活習慣等の実態
・生活実態
・自立的行動習慣、自己肯定感、道徳観・正義感
・探究力、身長と体重、近視傾向、主観的経済状況　他

②保護者調査

・公的機関が行う行事への参加、子供が行事へ参加しなかった理由
・子供の自然体験活動に関する意識
・保護者の子供へのしつけや教育等に関する実態
・保護者の自然体験の実態
・子供の幼児期における外遊び
・世帯収入や子供の教育費　他

（3）調査対象

・全国の公立小学校１年生・２年生・３年生の保護者
・全国の公立小学校４年生・５年生・６年生とその保護者
・全国の公立中学校２年生
・全国の公立全日制高等学校２年生

（４）調査実施時期

令和２年１月～４月

（５）回収数

配布数				回収数						
学校種別	学年	学校数①	在籍児童・生徒数②	学校数		調査票				
						子供用		保護者用		組数[d]
				回収数③	回収率[a]	回収数④	回収率[b]	回収数⑤	回収率[c]	
小学校	１年	100	2,881	89	89.0%	***	***	2,078	72.1%	***
	２年	100	2,803	83	83.0%	***	***	1,947	69.5%	***
	３年	100	3,030	92	92.0%	***	***	2,281	75.3%	***
	４年	100	3,014	85	85.0%	2,161	71.7%	2,162	71.7%	2,155
	５年	100	2,997	87	87.0%	2,173	72.5%	2,186	72.9%	2,164
	６年	100	3,083	81	81.0%	2,091	67.8%	2,088	67.7%	2,080
中学校	２年	150	5,160	119	79.3%	3,691	71.5%	***	***	***
高等学校	２年	150	5,522	125	83.3%	4,361	79.0%	***	***	***
計		900	28,490	761	84.6%	14,477	73.2%	12,742	71.6%	

回収率ａ：③÷①×100

回収率ｂ：④÷②×100

回収率ｃ：⑤÷②×100

組数ｄ：回収した調査票のうち、同一家庭で子供用と保護者用の調査票ともに回収できた数

※小学校の１～３年生は保護者が回答、４～６年生は児童とその保護者が回答した。よって、小学４～６年生の回答は、児童が回答したものと保護者が回答したものがある。詳細は報告書に記載している。

【調査結果の概要】

（１）2010 年代を通じて、子供の自然体験の一部に、やや減少傾向がみられる。

小学４年生、中学２年生、高校２年生の、自然体験の推移をみると、平成 17 年度から平成 24 年度にかけて「何度もある」の割合が大きくなり、平成 24 年度以降は横ばいで推移している。2010 年代を通じて、一部の自然体験については「何度もある」の割合にやや減少傾向がみられる。

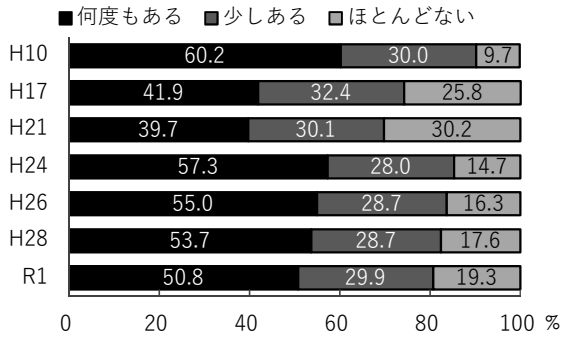

図１ 海や川で泳いだことの推移（小 4、小 6、中 2）

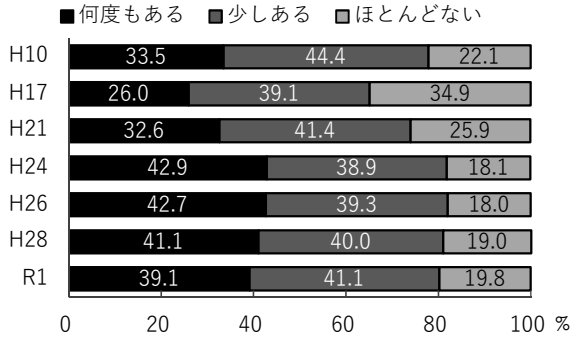

図２ 夜空いっぱいに輝く星をゆっくり見たことの推移（小 4、小 6、中 2）

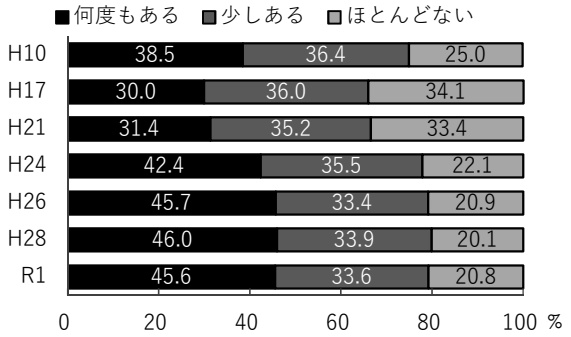

図３ 野鳥をみたり、鳴く声を聞いたことの推移
（小 4、小 6、中 2）

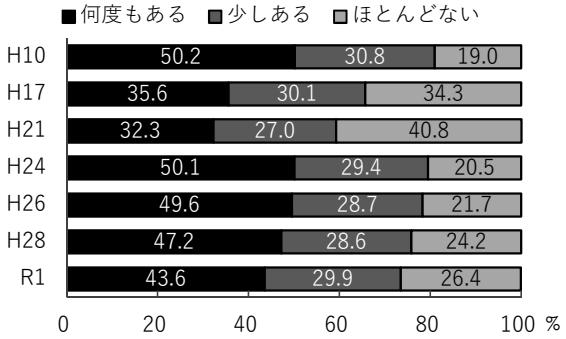

図４ チョウやトンボ、バッタなどの
昆虫をつかまえたことの推移（小 4、小 6、中 2）

平成 17 年度調査以降の数値を平成 10 年度調査の数値と比較するため、集計対象を小 4、小 6、中 2 のみとし、かつ不明な回答を除いている（生活体験・お手伝いについても同様）。
平成 21 年度までの調査票では「あなたは、次のようなことをどのくらいしたことがありますか。」、平成 24 年度以降の調査票では「あなたは、これまでに次のようなことをどのくらいしたことがありますか。」と教示している。

（２）自立的行動習慣が身についている子供や自己肯定感が高い子供の割合は増加傾向にある。

自立的行動習慣全体の推移をみると、平成 18 年度から令和元年度にかけて「身についている」と「やや身についている」を合計した割合は大きくなっている。

自己肯定感全体の推移についても、平成 20 年度から令和元年度にかけて「高い」と「やや高い」を合計した割合は大きくなっている。

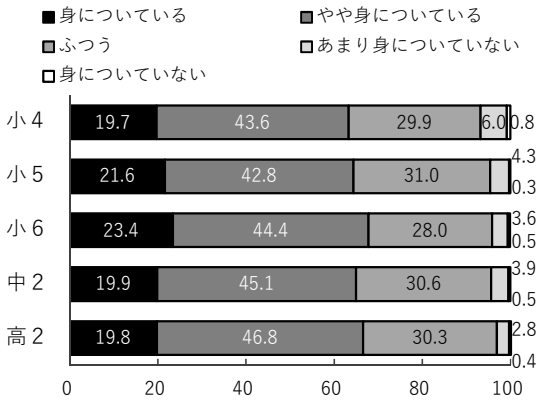

図５ 自立的行動習慣の現状（学年別）
（小 4～小 6、中 2、高 2）

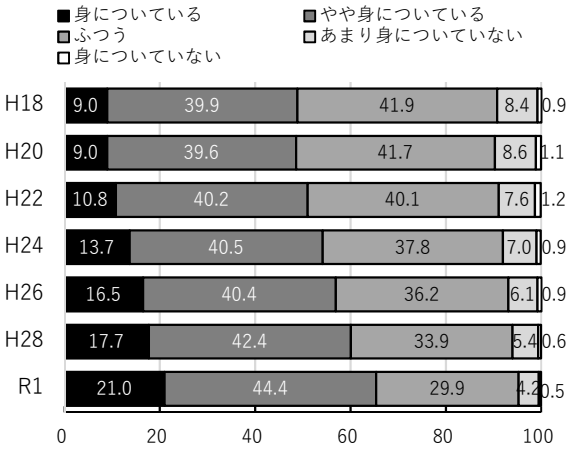

図６ 自立的行動習慣の経年比較
（小 4～小 6、中 2、高 2）

（3）自然体験や生活体験、文化芸術体験が豊富な子供、お手伝いを多く行っている子供は、自己肯定感が高く、自立的行動習慣や探究力が身についている傾向がある。

小学生、中学２年生、高校２年生の回答をあわせて、自然体験全体や生活体験、文化芸術体験、お手伝いの合計得点について、自立的行動習慣に関する指標、自己肯定感、探究力とそれぞれクロス集計を行ったところ、いずれの体験も豊富な群ほど、自立的行動習慣に関する指標、自己肯定感、探究力の高得点群の割合が大きくなる傾向がみられた。

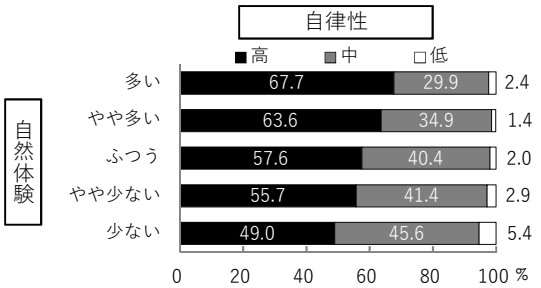

図７ 自然体験と自律性の関係

（小４～小６、中２、高２）

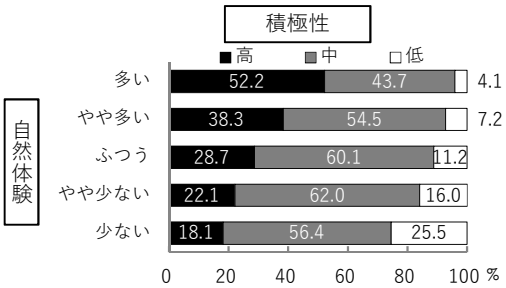

図８ 自然体験と積極性の関係

（小４～小６、中２、高２）

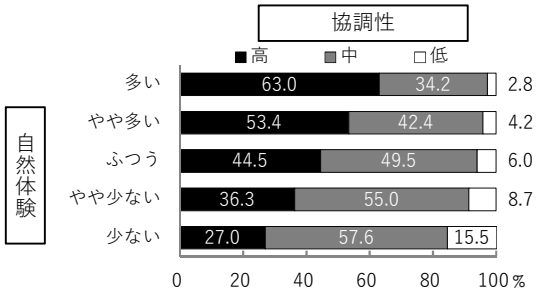

図９ 自然体験と協調性の関係

（小４～小６、中２、高２）

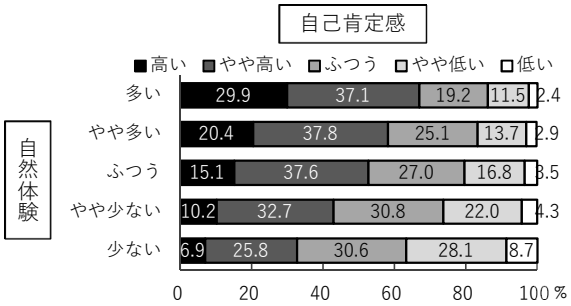

図 10 自然体験と自己肯定感の関係

（小４～小６、中２、高２）

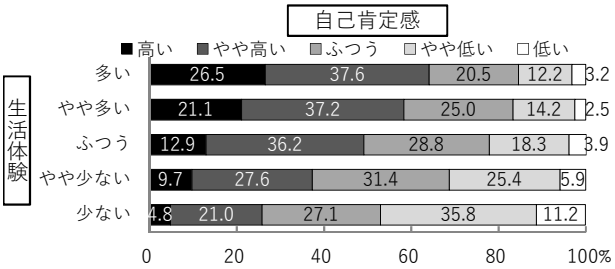

図 11 生活体験と自己肯定感の関係

（小４～小６、中２、高２）

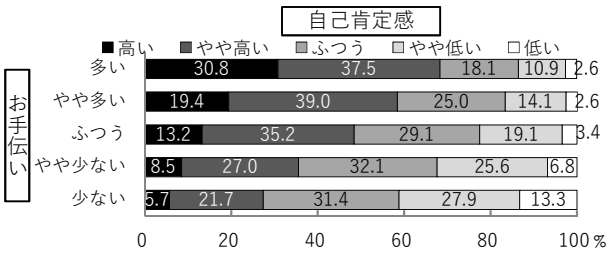

図 12 お手伝いと自己肯定感の関係

（小４～小６、中２、高２）

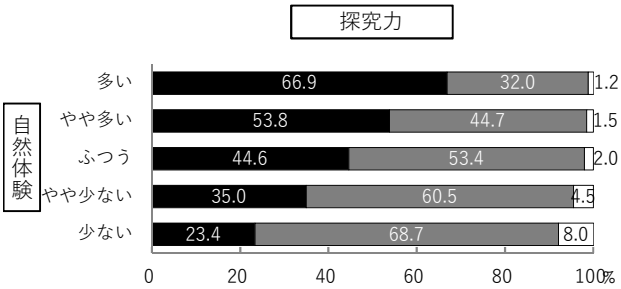

図 13 自然体験と探究力の関係

（小４～小６、中２、高２）

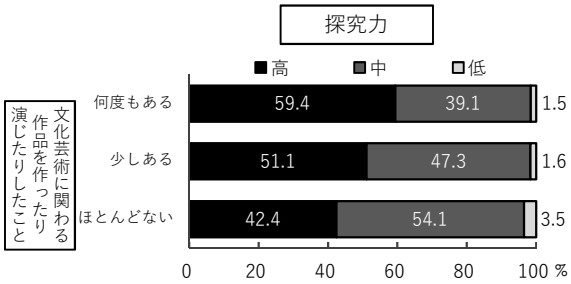

図 14 文化芸術に関わる作品を作ったり演じたりしたことと探究力の関係（小４～小６、中２、高２）

（4）就学前から子供の外遊びを奨励する保護者の働きかけに注目すると、その後の探究力の向上に影響を及ぼす。

保護者の就学前からの子供への外遊び奨励と、子供の外遊び志向性について児童の探究力との関連を分析したところ、就学前から子供の外遊び奨励を行ったと回答した保護者ほど、児童の探究力低群の割合は少なく、高群の割合が多いという関連がみられた。

就学前の外遊びが好きであった子供ほど、児童期の探究力低群の割合は減少し、中・高群の割合が増加する傾向がみられた。

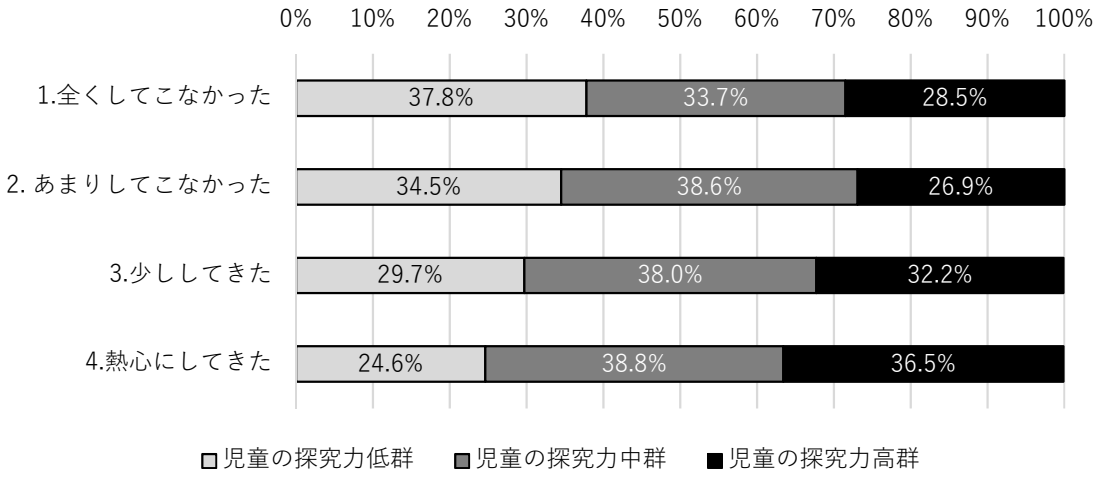

図 15 就学前からの保護者の児童への外遊び奨励別にみた児童の探究力（小 4～小 6）

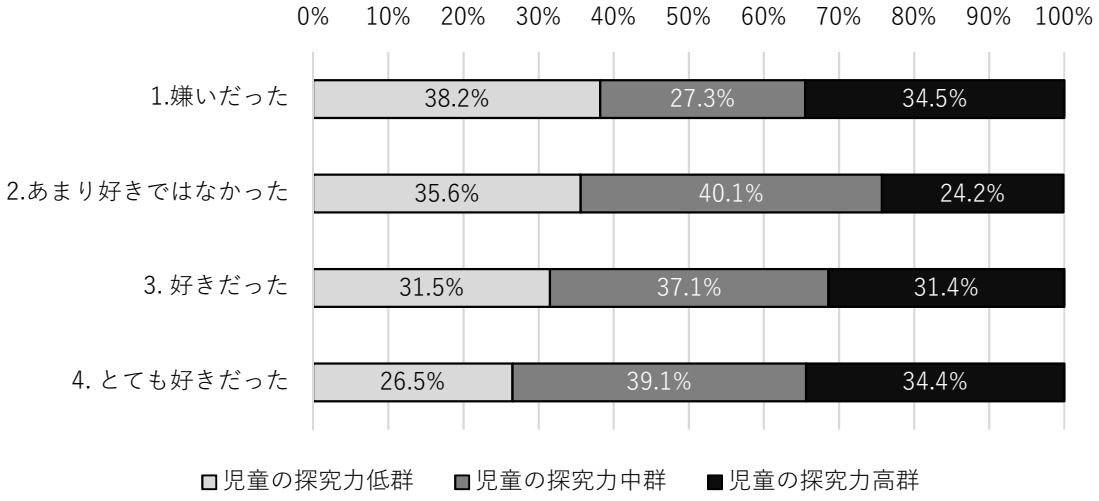

図 16 就学前からの子供の外遊び志向性別にみた児童の探究力（小 4～小 6）

（5）外で過ごす時間の長さが、子供の「肥満」と「近視」の抑制につながる可能性がある。

小学４年生から６年生の子供が一週間に外で過ごす時間と肥満および近視（注）との関連を分析したところ、外で過ごす時間が長いと肥満および近視の抑制につながる可能性が示唆された。

一週間に外で過ごす時間がほとんどない子供の群と比較して、10 時間以上外で過ごす子供は、肥満の確率が低かった。また、近視についても、外で過ごす時間が長い群の子供ほど、近視の確率が低かった。

注：「近視あり」の指標として、「（メガネ・コンタクトレンズを）使用している」と「使用していないが必要としている」を統合して用い、「（メガネ・コンタクトレンズを）使用していない」を「近視なし」の指標として用いた。

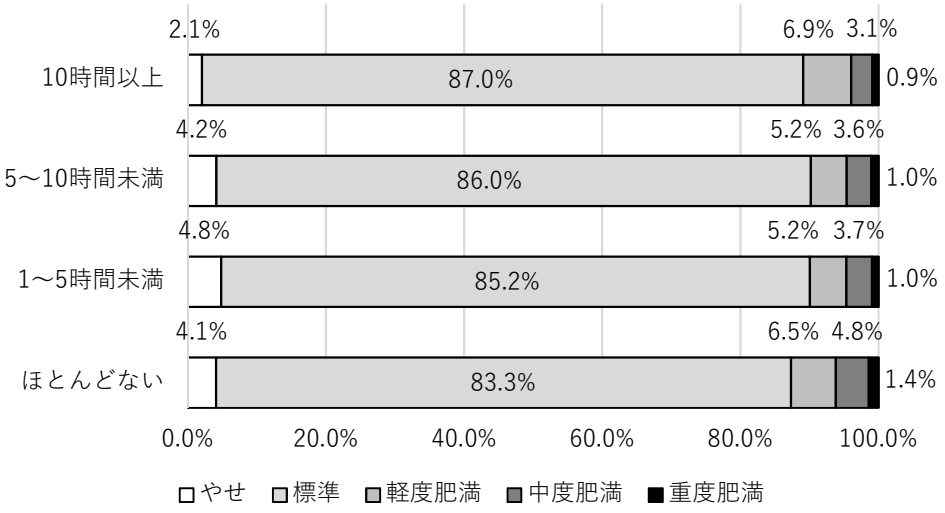

図 17 一週間に外で過ごす時間別にみた肥満傾向（小 4～小 6）

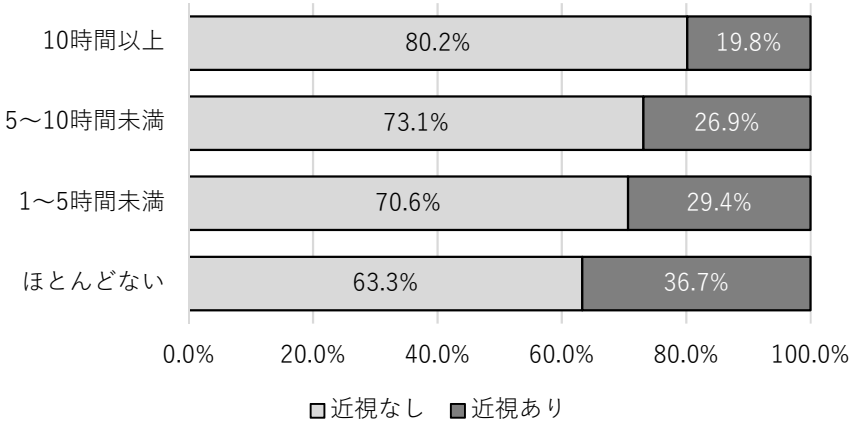

図 18 一週間に外で過ごす時間別にみた近視傾向（小 4～小 6）

（6）社会経済的背景の相違に関わらず、自然体験が多い子供ほど、自己肯定感が高く、自立的行動習慣が身についている傾向がある。また、公的機関等が行う自然体験活動に関する行事へ小学生が参加しない理由として、世帯年収が 400 万円未満の家庭は、経済的あるいは時間的な負担によるものが多くみられた。

社会経済的背景の指標として、世帯年収と主観的経済状況を取りあげ、世帯年収と子供の体験活動についてクロス集計を行ったところ、世帯年収が大きくなるほど子供の自然体験活動は多くなる傾向があることが示された。

一方で、自然体験と社会経済的背景（小学４～６年生においては世帯年収、中学２年生と高校２年生においては主観的経済状況）の指標を要因として、自己肯定感と自立的行動習慣に関する指標の得点を比較したところ、いずれの場合も社会経済的背景の相違に関わらず、自然体験が多い青少年の方が自己肯定感を抱き、自立的行動習慣を身につけていることが示された。

調査年の１年前（平成 31 年）の４月から調査時点までに公的機関や民間団体等が行う自然体験活動に関する行事への小学生の参加率は 50.0%であったが、参加しなかった理由は家庭の社会経済的背景によって異なっていた。特に世帯年収が 400 万円未満の場合は、経済的あるいは時間的余裕のなさと関係する内容が多くあげられていた。世帯年収が 400 万円以上～600 万円未満の場合は、子供が関心を示さないからという理由が多かった。一方、世帯年収が 1,000 万円以上の場合は、子供が行事に参加する時間がないといった回答が多くみられた。

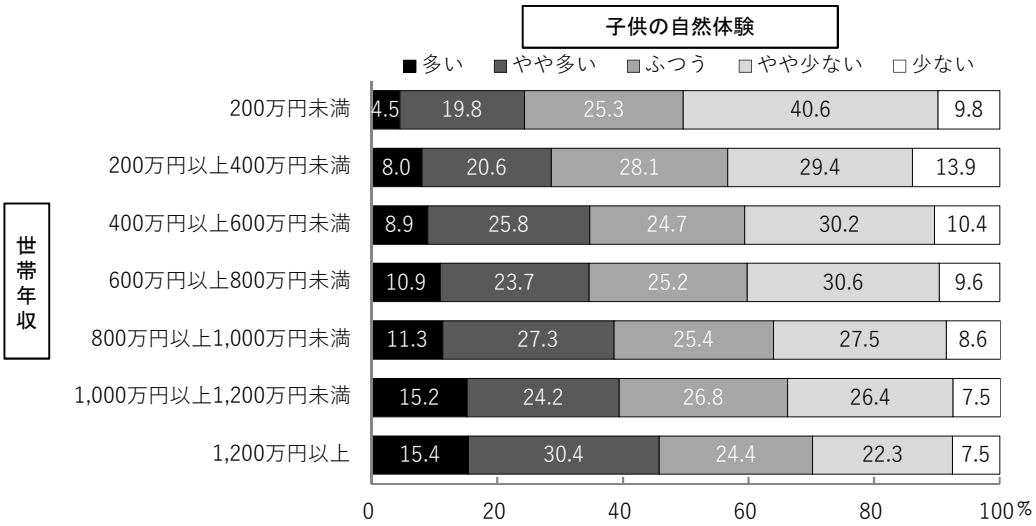

図 19 世帯年収ごとの子供の自然体験（小 4～小 6）

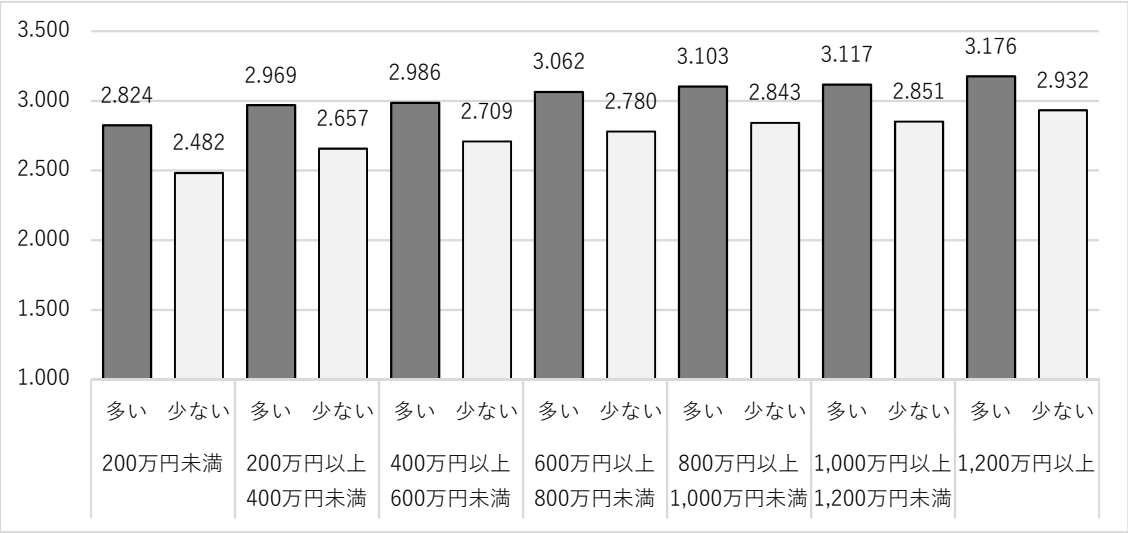

図 20 自然体験２群と世帯年収を要因とした自己肯定感に関する指標の得点比較（小４～小６）

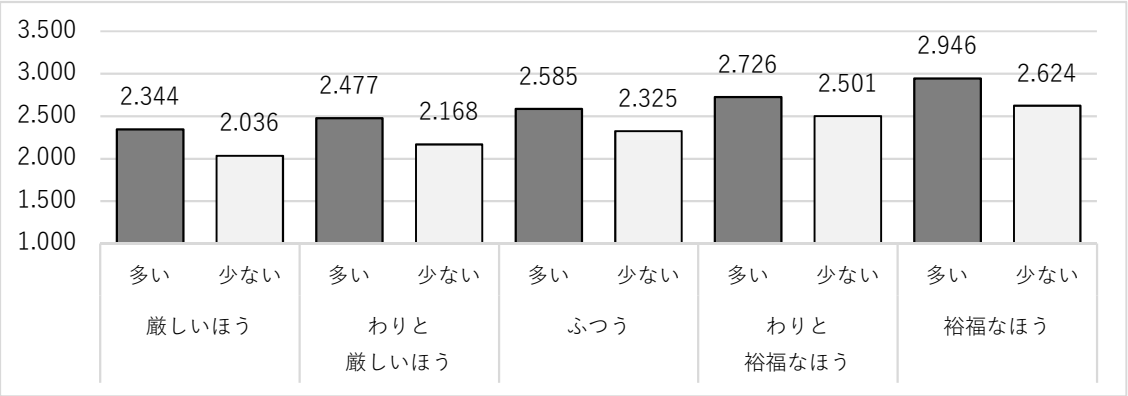

図 21 自然体験２群と主観的経済状況を要因とした自己肯定感に関する指標の得点比較（中２、高２）

【参考】

青少年の体験活動および意識等に関する質問項目例

生活体験に関する質問項目 ・ナイフや包丁で、果物の皮をむいたり、野菜を切ったこと ・タオルやぞうきんを絞ったこと ・道路や公園などに捨てられているゴミを拾ったりしたこと ・弱いものいじめやケンカをやめさせたり、注意したこと ・赤ちゃんのおむつをかえたり、ミルクをあげたこと ・小さい子供を背負ったり、遊んであげたりしたこと	お手伝いに関する質問項目 ・買い物のお手伝いをすること ・新聞や郵便物をとってくること ・靴などをそろえたり、磨いたりすること ・食器をそろえたり片付けたりすること ・家の中のお掃除や整頓を手伝うこと ・ゴミ袋を出したり、捨てること ・お風呂洗いをしたり、窓ふきを手伝うこと ・お料理の手伝いをすること ・ペットの世話とか植物の水やりをすること
自己肯定感に関する質問項目 ・学校の友だちが多い方だ ・学校以外の友だちが多い方だ ・勉強は得意な方だ ・今の自分が好きだ ・自分には、自分らしさがある ・体力には自信がある	道徳観・正義感に関する質問項目 ・家で「おはようございます」「いただきます」「いってきます」「ただいま」「おやすみなさい」といったあいさつをすること ・近所の人や知り合いの人に「おはようございます」「こんにちは」「こんばんは」といったあいさつをすること ・バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずること ・友だちが悪いことをしていたら、やめさせること

自立的行動習慣に関する指標

（「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査（平成 18 年度調査）」を元に作成）

＜自律性＞（12点満点）	＜積極性＞（12点満点）	＜協調性＞（12点満点）
・人の話をきちんと聞く	・困った時でも前向きに取り組む	・困っている人がいたときに手助けをする
・ルールを守って行動する	・自分の思ったことをはっきりと言う	・友達が悪いことをしていたら、やめさせる
・周りの人に迷惑をかけずに行動する	・人から言われなくても、自分から進んでやる	・相手の立場になって考える
・自分でできることは自分でする	・先のことを考えて、自分の計画を立てる	・誰とでも協力してグループ活動をする

※「高」＝9 点～12 点　「中」＝5 点～8 点　「低」＝0 点～4 点。

探究力に関する指標

知識及び技能	・新聞やテレビ、インターネットで、その日のニュースを読んだり見たりする ・国や地域の政治や選挙について関心がある ・実験や観察で新たな発見をすることに興味がある（※）
思考力・判断力・表現力等	・自分の思ったことをはっきりと言う ・先のことを考えて、自分の計画を立てる ・人の話をきちんと聞く ・相手の立場になって考える
学びに向かう力・人間性	・周りの人に迷惑をかけずに行動する ・自分でできることは自分でする ・わからないことは、そのままにしないで調べる ・困った時でも前向きに取り組む ・人から言われなくても、自分から進んでやる ・誰とでも協力してグループ活動をする ・困っている人がいたときに手助けする ・ルールを守って行動する ・日本以外の国や地域の生活や文化に関心がある（※）
※は、自立的行動習慣に関する 14 項目に追加した項目である。	

経年比較を行った調査

<table>
<tr><th>実施年度
（本調査での略記）</th><th>調査名</th><th>実施機関</th></tr>
<tr><td>平成 10 年度調査
（H10）</td><td>子供の体験活動等に関するアンケート調査
（文部省委嘱調査）</td><td>青少年教育活動研究会</td></tr>
<tr><td>平成 17 年度調査
（H17）</td><td>青少年の自然体験活動等に関する実態調査</td><td>国立オリンピック記念青少年総合センター</td></tr>
<tr><td>平成 18 年度調査
（H18）</td><td rowspan="4">青少年の体験活動等と自立に関する実態調査</td><td rowspan="7">国立青少年教育振興機構</td></tr>
<tr><td>平成 20 年度調査
（H20）</td></tr>
<tr><td>平成 21 年度調査
（H21）</td></tr>
<tr><td>平成 22 年度調査
（H22）</td></tr>
<tr><td>平成 24 年度調査
（H24）</td><td rowspan="2">青少年の体験活動等に関する実態調査</td></tr>
<tr><td>平成 26 年度調査
（H26）</td></tr>
<tr><td>平成 28 年度調査
（H28）</td><td>青少年の体験活動等に関する意識調査</td></tr>
</table>

2.4. 公的機関等が行う行事への参加

小学生が公的機関や民間団体等が行う自然体験活動に関する行事への参加率は50.0%

自身の子供が、調査年の1年前（平成31年）の4月から調査時点までに公的機関や民間団体等が行う自然体験活動に関する行事への参加率は50.0%であった（図2-4-1）。「参加しなかった」と回答した保護者へ理由を選択式で尋ねた結果、「子どもが関心を示さないから」（34.3%）、「保護者などの時間的負担が大きいから」（24.3%）、「団体や行事などがあることを知らないから」（16.8%）が多くみられた（図2-4-2）。「特に理由はない」（21.8%）という回答も2割ほどみられた。

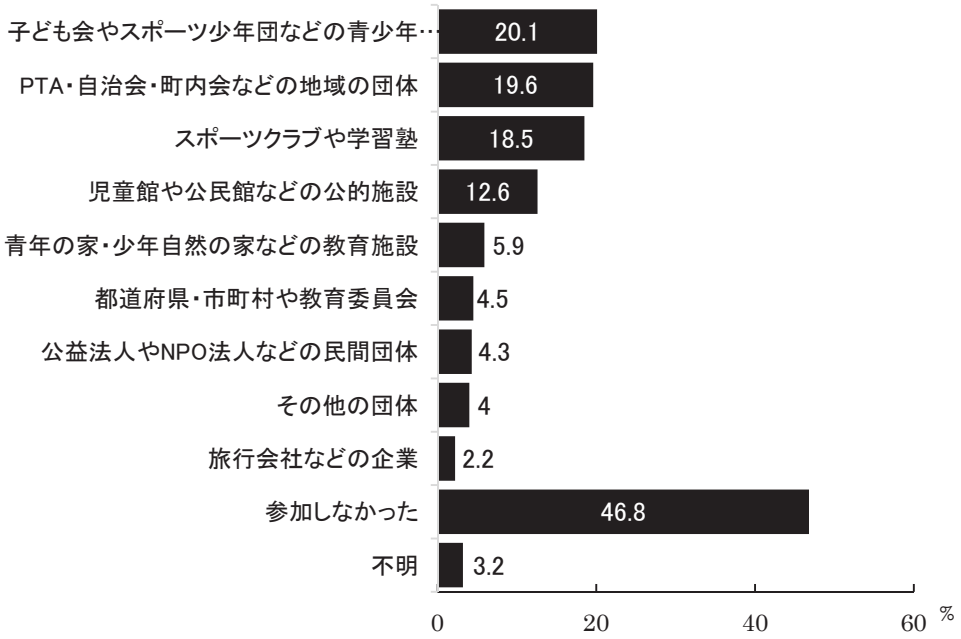

図2-4-1 公的機関等が行う行事への参加状況

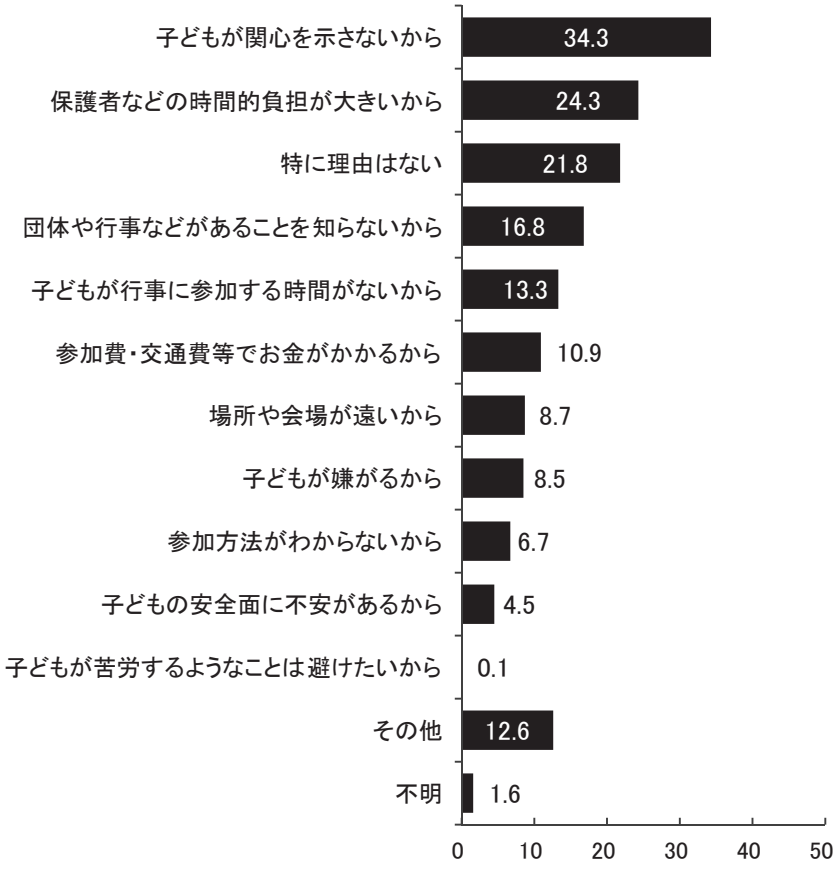

図2-4-2 公的機関等が行う行事に参加しなかった理由（小１～小６）